



日常を「発見」に変える力



もうすぐ立春を迎えようとしていますが、まだまだ寒さの残る日が続いております。先日、私は「田中達也展 みたてのくみたて MINIATURE LIFE・MITATE MIND」に行ってきました。田中達也さんは、ミニチュア写真家・見立て作家として世界的に活躍されています。皆さんもその作品をご覧になったことがあると思います。なんと、富士市で採用している算数の教科書の表紙が、まさに田中達也さんの作品なのです。かぼちゃやトマトが気球になったり、チョコレートを組み合わせてビルに見立てたり…。そこには、大人が見落としてしまいそうな日用品を、まったく別のものとして再定義する驚きとユーモアがあふれています。この「見立て」の根底にあるのは、徹底した「観察」と、固定観念に縛られない「想像力」です。実は、この二つこそが、科学の発展を支えてきたエンジンそのものなのです。

科学の歴史を振り返ると、偉大な発見は常に「当たり前風景を、違う角度から見る」ことから生まれています。ニュートンは、木から落ちるリンゴを見て、天体の動きを支配する「万有引力」を確信しました。ライト兄弟は、鳥の翼の動きを観察し、空気の流れをどう操るかを考え抜いて空を飛びました。彼らに共通しているのは、田中達也さんのように「もし、これを〇〇だと考えたらどうなるだろう？」というわくわくするような仮説を立てたことです。既存のルールや常識という色眼鏡を外し、対象をまっさらな目で見つめる力。これこそが、未知の領域を切り拓く科学の第一歩です。



学校生活においても、子どもたちは毎日多くの「見立て」を行っています。葉っぱをお花に見立てたり、雲の形を動物に見立てたり…。こうした子どもたちの柔らかい発想は、決して「遊び」だけで終わるものではありません。「なぜこう見えるのか?」「もしこう変えたらどうなるか?」そんな小さな問いを大切に育てることで、物事の本質を見抜く科学的な思考力が養われていきます。田中達也さんの作品が私たちに惹きつけてやまないのは、私たちが忘れかけていた「世界を新鮮な驚きで見る力」を思い出させてくれるからだと思います。

今年度も残りわずかとなりました。ご家庭でもぜひ、「これ、何に見える?」といった会話を楽しんでみてください。その一言が、未来の科学者への第一歩になるかもしれません。

【卒業証書の「割印」廃止のお知らせ】

富士市教育委員会からの通知により、今年度から卒業証書の「割印」を廃止します。

「割印」とは、卒業証書原本と卒業証書授与台帳（卒業生の一覧が記載されている学校保存の帳簿）の関連性を証明するために、2つの紙面にまたがらせて押す印鑑のことです。従来からの慣習として押印されてきましたが、「割印」についての法的根拠はなく、「割印」がなくても卒業証書は有効であるとのことでした。また、諸帳簿の電子保存を進めるためにも、「割印」を押さないこととなりました。

ご理解のほどよろしくお願いいたします。